

# 第33回 日本助産学会学術集会

世界に躍進する日本の助産 ～いのちの担い手、愛と知と技～

会長：谷口 初美

(九州大学大学院医学研究院保健学部門看護学分野 教授、ICM West Pacific 担当理事)

会期：2019年3月2日(土)～3日(日)

会場：福岡国際会議場

## ランチオンセミナー 4

# 助産師に期待する胎児・新生児のケア

2019年3月2日(土) 12:00～13:00

4F 第5会場

当ランチオンセミナーは整理券制(当日配布)です

配布場所 福岡国際会議場 1F ランチオンセミナー整理券配布所

配布時間 8:00～11:30(なくなり次第終了)

座長

渡部 信子 先生 (トコ助産院 院長 トコ・カイロプラクティック学院 学院長)

仲 真衣 先生

ふわりーPersonal Careーセラピスト

数々の不定愁訴を乗り越え地域のママへの“伝え人”に変わった私  
～助産師のひと言が私と子どもの人生を変えた～

福岡 秀興 先生

早稲田大学ナノ・ライフ創新研究機構 規範科学総合研究所 招聘研究員

千葉大学医学部 客員教授 福島県立医科大学 特任教授 日本DOHaD学会 代表幹事

厳しい妊婦体重管理は必要か? ～DOHaDと先制医療から考える～

# ランチオンセミナー 4

## 助産師に期待する胎児・新生児のケア

数々の不定愁訴を乗り越え地域のママへの“伝え人”に変わった私  
～助産師のひと言が私と子どもの人生を変えた～

ふわりーPersonal Careーセラピスト 仲 真衣 先生

仮死で生まれた私。普通の子どもではあるけれど、スッキリしない心身の不調を抱えながら育ちました。小児喘息・摂食障害・椎間板ヘルニアなど、病名は挙がるも“病気以上健康未満”の状態。“快活・元気な私”を夢見て、10年運動部で鍛え、海外生活も経験。その後、大企業の総合職として就職。

しかし、体調は依然モヤモヤ。「結局は体質」と諦めたまま第1子を妊娠した途端、悪阻で休職、25週で切迫早産、自宅安静。産後も泣き止まない我が子に四苦八苦。その時に、骨盤ケア・まるまる育児に出会い、体調は年々快方に向かい、第2・3子のときには順調な妊娠～育児

を経験しました。

「数々の不定愁訴は“姿勢”が関係しているのでは」と考えるようになった私は、2年前に地域の母子への“伝え人”を志しセラピストとして開業。多数の母子が来室する中、感じるのは「母子ともに辛い状態に陥ってからでは遅い！医療者ではない私の言葉だけでは伝わりきらない。」人の認知・行動は、誰に出会いどんな言葉をもたらすかによって変わります。妊娠～育児中の助産師のひと言の価値は絶大です。

今こそ、全ての職業人が母子の健康増進を目指し、協力し合うべき時ではないでしょうか？

厳しい妊婦体重管理は必要か？

～DOHaDと先制医療から考える～

早稲田大学ナノ・ライフ創新研究機構 規範科学総合研究所 招聘研究員  
千葉大学医学部 客員教授 福島県立医科大学 特任教授  
日本DOHaD学会 代表幹事 福岡 秀興 先生

日本では約10年間、低出生体重児の割合が9.6%前後を推移している。多くの要因が胎児発育を規定するが、栄養摂取量の不足は出生体重低下の大きな要因である。

クル病・二分脊椎症も増加しており、妊婦の栄養状態は望ましくない。受精から幼児期は遺伝子発現を調節するメカニズムであるエピジェネティクスが大きく変化し、栄養はその

中心(nutri-epigenomics)である。

それ故胎内低栄養は生活習慣病発症の大きな素因である〔DOHaD説:Developmental Origins of Health and Disease〕。

この時期の栄養指導は児の将来を大きく決定するものであり、周産期医療に携わる我々の責務は極めて大きい。皆様と共に考えていきたい。

